

「今、私の晴雨計は！③」

「北スペインの街で！」 2

平山征夫

ビルバオから高速バスで一時間半、フランス寄りのバスク地方第二の都市サンセバスチャンで借りたマンションに着いた私は、夕方（と言っても日没は夜九時なので六時頃はまだかなり日は高い）の散歩に出かけた。後で夕食に行く旧市街でない方と思いきマンションの裏手に廻ったら、坂道の道路脇にエスカレータがあった。かなり急な登り道なので「助かるなあ」と思いつつ乗ってゆくとさらに先にもエスカレータが続いている。結局この坂には住宅地のほぼ一番上まで四本のエス

カレータが続いていた。住宅地の坂道にエスカレータが続いている風景には正直感動を覚えると同時に驚いた。

これでも大学で「地域経営論」を講義してきた私は、創造的都市計画による再開発の少ない成功例としてビルバオなど北スペイン・バスク地方の都市が例示されていることは知っていたが、今回家族旅行先に選んだのは何より滞在型観光地と美食で有名だったからだ。もう一つは都市再開発の成功状況を見たかったからだ。バスク地方の中心都市ビルバオ市はかつて鉄鋼と港湾の街として栄えたが、二十世紀後半次第に衰退の途を辿った。その時、バスク州政府が執った再開発計画は

驚くほど思い切ったものだった。

中心事業となったのは現代アートで有名な「グッゲンハイム美術館」の分館誘致だった。鉱山王で財をなしたソロモン・R・グッゲンハイムがニューヨークで設立したこの美術館は、日本でも帝国ホテルなどの設計で有名なフランク・ロイド・ライトが担当、大きな吹き抜けが評判だったが、同美術館を運営するグッゲンハイム財団は、多館戦略、国際戦略をとっており、ヴェネチア、ラスベガス、ベルリンなどに分館を展開していた。バスク州政府はビルバオ市の都市再生計画の象徴としてこの分館誘致を計画したのだ。

一九八九年に建てられたビルバオ市再生プロジェクトは、バス

ク州政府による十五億USD、

十八件に上る総合的な都市再生計画だった。グッゲンハイム美術館の分館計画の他にも新空港、地下鉄、自然公園、展示場、国際会議場、スポーツ・文化センター、テクノパーク、歩道橋など幅広い計画が盛り込まれた総合都市再生計画であった。スペインで人気の高かった日本人建築家磯崎新氏による「磯崎ゲート」というツインビルも地域開発プランとして盛られていた。この計画には磯崎氏以外にも多くの建築家がそれぞれのプランで関わったのだ。

その中でも河口の港湾地域等の再開発が最大のテーマで、そのメインプランとしてグッゲンハイム美術館の分館誘致が計画され

たのだ。これにバスク州政府は思
い切った投資を用意した。美術館
の建設費用一億USドルをはじめ
め、新規作品購入費用5000万
USドル、展示会開催一回当たり
2000万USドル、更に美術館
の運営年間予算補助1200万
USドルを申し出たのだ。そして
この新たな美術館が話題となっ
たのはNYのライトの設計を上
回る大胆なフランク・ゲーリーの
設計だった。ゲーリーはアメリカ
人の建築家で、日本人の磯崎新を
含む三者コンペから選ばれたも
のの美術館の設計は未経験だっ
た。しかしその建物外壁の局面の
無規則性、内部のアトリウムの開
放性など大胆かつ斬新な設計は
作品以上に大きな反響を呼んだ。

実際にこの美術館を鑑賞した
私の感想は「現代アートがこんな
に都市に似合っているとは！さ
すがピカソやダリやミロが出た
国だな」ということと、「現代ア
ートによる都市再生が見事に成
功したのは、思い切ったプランを
実行したからだな」という事だっ
た。年間一〇〇万人近い人がスペ
イン国内、フランス、ドイツ等か
ら訪れている。この美術館の象徴
になっている屋外展示作品の「バ
ビー」（季節の花で覆った巨大テ
リエ犬でジェフ・クーンズの作品）
と「ママン」（巨大な蜘蛛のオブ
ジェ、ルイズ・ブルジョアの作
品）には多くの観光客が群がって
記念写真を撮っていた。川べりの
散策路、電車道と道路、並木とグ

リーンベルトなど信濃川の河畔
整備と比較して大いに参考にな
った。
サンセバスチャンは旧市街を
活かしながら、大聖堂を中心とす
る新市街地を一带で繋げた街づ
くりと、海岸の遊歩道・公園の整
備、スペイン・フランス等の都市
との交通網の整備などを都市再
生計画で実行した。大きく湾曲し
たラ・コンチャ湾、薄茶色の綺麗
な砂浜、湾の真ん中に浮かぶサン
タ・クララ島、そこに沈む夕日は
この街の最大の財産だ。それを十
分発揮できるようにしたのがこ
の再生計画だった。そして美食の
メッカとして売り出し、近年多く
の観光客が訪れている。私たちは
小さな孫連れということもあり、

星付きの高級レストランには行
かず、前回述べたようにバルでピ
ンチヨスを楽しんだが、この街の
美食（ガストロミー）への情熱に
は感心させられた。本屋でピンチ
ヨスのコンクールの優秀作品等
が乗った本を見たが、もはや芸術
作品だった。
だが実は私が一番驚いたのは、
この街が高々人口十八万人強（ピ
ルバオで三十七万人位）くらいな
のに、年間幾つものすごいイベン
トを行っていることだ。大きいも
のだけでも一月のタンボーラ（聖
セバスチャンの祭、太鼓祭り）を
はじめとするサンタ・アヘダ・ベ
スペラやカルデロス、サント・
トマスなどの伝統的なお祭りに
加えて、国際ジャズフェスティバ

ル、国際映画祭、音楽週間、バス
ク週間、セマナ・グランデという
大花火大会などを行っている。新
潟市も夕日の街だ。でも新潟で夕
日を見ているのは、海岸でジョギ
ングや釣りをする一部の市民く
らいだ。サンセバスチャンでは毎
夕沢山の観光客が見ている。

バスク地方の都市再生計画が成
功した背景には、スペインのこの
地方が昔からナポレオン戦争や
スペイン戦争などによる相次ぐ
破壊から街を復興してきた歴史
を持っているうえ、フランコ独裁
政権の圧政を通じてバスク人の
強い独立心が養われたことがあ
るが、最も大きな要因は二〇世紀
末のこの時期に地方分権が進み、
都市再開発等は州が一手に担う

ことで権限、財源が移管されたこ
とだ。これがあの思い切った州
の都市再生計画が実行できた主
因だ。日本ではそうなっていな
い。

帰国して新潟市長と会う機
会があったので、「非常に新潟市
にとって参考になる街だった」
と申上げたところ、市長からは
「ビルバオ市は良く知っていま
す。視察団も派遣しました」と
言う。二〇一五年に新潟市が「東
アジア文化都市」に指定され「食
文化創造都市にいがた」を打ち
出しシンポジウムなどを行った
際、美食先進地としてビルバオ
で美食運動の中心となっっている
人物を招いたのだ。しかもこの
秋には市長自身ビルバオを訪問

する予定とのこと。「折角ですの
で美食だけでなくグッゲンハイ
ム美術館を中心とする都市再生
計画をどう進めたかをサンセバ
スチャンも含めてみてきてくだ
さい。夕日の街づくりや川べり
の公園化なども大いに参考にな
りますよ」と申上げた。

昨年の北陸新幹線の開通以
来金沢市が未だに観光客でごっ
た返しているのに対し、中心市
街地古町の衰退に悩む新潟市と
対称的な表情を見せている。「札
仙広福」に追いつこうと政令指
定都市を目指し実現したものの、
政令指定都市を諦めた金沢市に
水を開けられた新潟市、もしか
するとずっと人口の少ないにも
かわらず、ずっと大きな都市

再生を実現したスペインのバス
ク地方の都市は大きなサジェス
ションになるのではないだろう
か。

(平成二十九年六月二十二日)